



Title	The Influence of Cognitive Absorption During the Interaction with Short-Form Travel Video on Tourists ' Subsequent Behavioral Intentions [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	周, 涵
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第15808号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91965">http://hdl.handle.net/2115/91965</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Zhou_Han_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：周 涵

審査委員	主査	特任教授	伊藤 直哉
	副査	教授	辻本 篤
	副査	准教授	ジャン ジュヒョク

### 学位論文題名

The Influence of Cognitive Absorption during the Interaction  
With Short-Form Travel Video on Tourists' Subsequent Behavioral Intentions  
(短編観光動画の認知的没入体験が観光客のその後の行動意図に及ぼす影響)

新型コロナウイルス感染症の発生と引き続く世界的パンデミックの混乱は、観光産業に壊滅的打撃を与えた。感染症による不安は旅行者の旅行意欲にも影響を与え、市場だけではなく観光消費者の内面からも旅行意欲は消え去った。パンデミックの終息に兆しが見え始めると、旅行意欲と市場復活への再生シナリオの早急な対応が求められ始めた。その一方、旅行関連のオンライン・コンテンツは、コロナ禍中の旅行需要を代替するという役割も果たしていた。特に、TikTokをはじめとする短編動画サービスはコロナ禍においても急速に発展し、旅行者の旅行意欲にも継続的に影響を与え続けていた。特殊なアルゴリズムによりプッシュされるコンテンツはユーザに潜在的興味を連続的に喚起させ、「認知的没入」という現象を引き起こしていることが知られている。本研究はこの「認知的没入」を取り上げ、観光目的地喚起の短編動画を題材に、行動意図や観光意欲への影響関係を検証している論考である。

本論考は3つの調査と実証研究により構成されている。3つの研究に共通する問題意識は、観光目的地推奨短編動画を対象に、認知的没入理論に基づいて、没入的視聴体験が視聴者の信念形成や心理的反応に、さらには訪問意向を含む行動意図に及ぼす影響を探っている点を調査設計に組み入れている。3つの定量調査はいずれも SmartPLS により分析され、グループ間の比較は MGA（マルチ・グループ分析）が行われ、認知的没入体験と訪問意向の有意な関係性が検証されると同時に、認知的没入理論そのものの検証解明も行われている。

る。このような論考に対して、学位論文審査委員会では、以下のような質疑が行われた。

まず、3つの研究において独立変数に位置付けられている「認知的没入」という分析概念と、分析対象である観光目的地推奨短編動画へのマッチング、分析概念の有効性と限界に関する議論が行われた。筆者からは、その分析概念の有効性と応用可能性に関する答弁と議論が行われ、審査委員会一同はその内容に関して了承した。また、本研究データの取得時期と分析結果はコロナ禍の影響下で行われているが、コロナ禍明けの現在、本研究のどの部分が依然として有効であり、有効でないのかという、本研究のコロナ禍から見た有効性と限界の議論も行われた。さらに、観光目的地推奨動画の視聴グループを、中国国内目的地と国際目的地グループに分けた理由とその結果に関しても議論された。

このような研究全体に関わる議論と同時に、個別の調査分析についての質疑応答もなされている。調査1における因子間の関係性、特に優位が出なかったパスに関する議論、従属変数に至るパスに関する議論等が行われた。調査3におけるフィルターに関する質疑応答もあった。また3つの調査共通に関する議論として、本研究に関するサンプリング方法論全般に関する確認と議論があったことも記しておく。いずれの質疑に対しても筆者からは適切な回答がなされ、審査委員会一同は納得した。また、質疑応答中になわれた議論は学問的に質が高く、筆者の高い資質を十二分に示していると評価された。

最後に、本学位論文審査委員会の開催に先立ち、論文剽窃チェック・ソフトにより、剽窃ならびにコピペのチェックを行ったが、適正な数値結果を得られたことをここに確認しておきます。

以上の審査結果をもとに、本論考に対して審査委員会は慎重な議論と検討を行った結果、本研究の学問的意義、方法論的信頼性と妥当性は十分であり、学問的貢献、実務的貢献においても、その意義や波及効果は十二分に高いものと判断しました。そこで、本審査委員会は、本研究を北海道大学博士（学術）に相応しい学術論文であることを全会一致でここに認め、その結果をここに報告するものであります。